

一羽の小禽

川田 順

妙心寺 天球院の障屏畫

苔生す幹をうねらせたる梅の、最高所に
まり、極めてちひさき一羽の禽は、斜め
に空を見て、春の頌歌をうたつてゐるら
しい。

「なんぞせうか、この小禽は。朝鮮駒鳥ち
やと申しますわい。」僧とわたくしとは、
ただこれだけの言葉をかはした。

山楽にせよ、山雪にせよ、何人にしても、

この畫面の處理法は秀抜だ。もしも、こ
の小禽が、あつたならば、四面に描か
れた山も、雉子も、橋も、躑躅も、亭
々たる櫓も、柳に下りた白鷺も、雪のつ
もつた岩石さへも、轂を外れた輻の如く、

北斗の消えた七星の如く、向きむきにな
つて、中點を失ふ。

わたくしは、ひそかに自分へサキヤ鼻ハナいた。こ
の小翁に生まれて来度い。